



第94回マッセ・セミナー

「文化による都市再生  
～芸術が大阪のまちを変える～」

開催日：平成27年7月2日(木)

会場：マッセOSAKA 5階 大ホール

講師：劇作家・演出家 平田オリザ氏







## 第94回マッセ・セミナー

## 「文化による都市再生～芸術が大阪のまちを変える～」

平田 オリザ 氏  
(劇作家・演出家)

2

## 1. はじめに

今日は文化政策の話をしてします。大学の講義ではないので、皆さんにも身近に思ってもらえるように、東日本大震災、神戸の震災のことも含めて話をしたいと思います。

最初に紹介したいのが、宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』です。宮沢賢治は、花巻農学校の教員を退職して、昼は農作業、夜は農民たちとエスペラント語を学んだり、演劇をしたり、音楽を楽しんだりする羅須地人協会というある種の協働組合をつくりました。そのときに書いた、なぜこれからは農民が芸術を楽しまなければいけないかというマニフェストのようなものが、この『農民芸術概論綱要』です。その中で、宮沢賢治はこう言っています。

「職業芸術家は一度亡びねばならぬ 誰人もみな芸術家たる感受をなせ 個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ 然もめいめいそのときどきの芸術家である」

要するに、これからは、農民はみな芸術家にならなければならないということを行っているのです。なぜこんなことを言ったのかということ、今日の講演の中では考えていきたいと思っています。

## 2. 社会に必要とされる経済活動の無駄

私は昨日まで、福島県双葉郡広野町という福島第一原発に一番近いところにある、ふたば未来学園というところで教えていました。一昨日は小豆島にいて、その前の日は高松、その前の日は岡山にいました。大体一年中そういう仕事をしています。日本中の地方都市を回る生活を20年ぐらい続けてきたのですが、その中で感じるのは、日本の地方都市が非常に画一化してきたということです。

国道があって、バイパスがあって、バイパス沿いに大きなショッピングセンターができて、中心市街地がどんどん寂れていく。これは日本中の地方都市が抱えている問題なのです。

私は1979年に初めてアメリカに行ったのですが、1970年代末のアメリカの風景に非常によく似てきた感じがします。1970年代末は、アメリカがベトナム戦争の影を引きずって精神的にも経済的にも最も落ち込んでいた時代でした。白人中産階級は車でショッピングセンターに行って帰ってくるだけです。中心市街地は完全にスラム化して、昼間でも寄りつけません。日本はここまでひどくはなっていませんが、現実には空き店舗や特に空き家問題が深刻な自治体があると思います。空き店舗や空き家にいわゆる不良少年たちやホームレスの方たちが入り込んで、非常に危険な状態になっているという報告も既に出ています。

ただ、これは決して何十年も前からあった状態ではありません。この20～30年で完成された風景です。要するにそれは、消費社会と金融経済がこの20～30年で一挙に全国に広がったということです。私が先日行った岡山県の例を挙げてみます。銀行で言うと、三菱銀行や住友銀行という都銀は中国地方では広島にしかありませんでした。また岡山には、デパートは天満屋というデパートしかなく、東京資本のデパートなんてなかったのです。今、岡山駅前に巨大なイオンができて、ほとんど今そこに集中しています。その翌日に行った高松は、岡山資本の天満屋が数年前に撤退しています。

そのように東京資本のショッピングセンターやデパート、銀行が進出してきたのは、この20～30年のことです。もちろんそれにはいい点もあります。どんな地方に住んでいる人でも、安くいい商品をいつでも手に入れることができるようになるわけです。しかし、その利便性を追求するあまり、私たちは失ってきたものがあるのではないかと思うのです。経済活動から見ると一見無駄に見えるけれども、社会全体にとってはどうしても必要な機能を失ってしまったのです。例えば、抽象的なところで言うと、「となりのトトロ」に出てくる鎮守の森という広場、あるいは伝統芸能や神話の継承といった時間、そういう空間や時間を失ってしまいました。

もっと分かりやすい例で言うと、中心市街地、商店街が寂れていくと、最初につぶれるのが床屋さんや銭湯だといわれています。『浮世床』『浮世風呂』という名前ぐらいはお聞きになったことがあると思いますが、これは江戸時代の

滑稽本の題名です。要するに銭湯や床屋というのは、江戸時代以来のコミュニティースペース、人と人が出会う場所だったのです。

私は東京生まれ東京育ちなのですが、駒場という小さな商店街の中で育ったので、2軒隣が床屋さんなのです。今もそうです。2軒隣が床屋だと、他で髪を切れません。他で切るとばれてしまうでしょう。だから、絶対にそこで切らないといけないのです。僕は50年以上生きていますが、そこ以外の床屋で切ったのは17回しかありません。海外に留学していたり、長く海外にいるとき以外はどんなに忙しくても、予約を取るようなところではないのですが予約を取って、その代わり9時半開店なのに9時に開けてもらったり、夜、最後にしてもらったりと、とにかくそこで切るので。商店街の付き合いは面倒くさいです。だけど、やはり行くと得難い情報が得られて、「あそこの夫婦は危ないらしいですよ」とか、「あそこは相続税が払えなくて引っ越すみたいですよ」とか、情報ステーションの役割も果たしているのです。

ある一定の年齢以上の方は思い出していただけたらと思うのですが、昔の床屋さんというのは、髪を切っている人の横で子どもたちが漫画を読んでいて、その横でおじさんが将棋を指したりしていて、私はこのおじさんたちはいつ仕事しているのだろうと思っていました。この将棋を指しているおじさんたちは、経済活動からすると無駄な存在です。だって、店番をさぼって将棋を指しているからです。でも、このおじさんたちが子どもたちの監視係であり、教育係の役割を果たしていたのです。

今、恐らく皆さんの自治体でも、例えば犬の散歩を子どもの通学の時間帯に合わせたりして、見守り運動をほとんどやっていると思います。でも、かつての商店街はそんなことは必要ありませんでした。見る、見られるという関係が自然にできていたからです。例えば駄菓子屋さん、子どもが10円玉を握りしめて買い物に行きます。ある日、1万円札で買い物に行ったら、駄菓子屋のおばさんが注意するわけです。子どもに直接言わなくても、お母さんに「お宅のお子さん今日1万円札で来たわよ。景気いいわね」と、ちょっと嫌味交じりで報告するのです。こういうものは無意識のセーフティーネットと呼んでいます。かつての地域共同体には無意識のセーフティーネットが張りめぐらされていたのですが、市場原理を優先してしまうと、そういう機能が失われていってしまうということなのです。

### 3. 市場原理の地方への影響

まず皆さんに覚えておいていただきたいのは、こういった市場原理、マーケットの原理というのは、地方ほど、辺境ほど、荒々しく働くということです。例えば、私は20年ほど前に、沖縄県の与那国島に1か月滞在して作品を作るという仕事をしていました。こういうものを最近アーティスト・イン・レジデンスといいます。その走りでした。

与那国島は東京から2,000km、台湾まで120kmという南の端の島です。与那国島には本屋さんがありません。雑貨屋さんに漫画などが置いてあるのですが、それも「ジャンプ」や「マガジン」など絶対に売れる本しか置いてありません。「スピリッツ」や「週刊文春」でさえ置いていないのです。本を買おうと思うと、40分飛行機に乗って、石垣島まで行かなければいけません。でも、石垣島にも僕の本は置いてありません。今は置いてあるかもしれませんが、当時は置いていませんでした。当時、那覇への直行便もなかったので、僕の本を買おうと思うと、さらに1時間飛行機に乗って那覇まで行かなければいけません。与那国島の人は本を読まないでいいのでしょうか。いいと言われればそれまでなのですが、そうでないから私たちは全国に三千数百の公立の図書館をつくってきたわけです。本を読むということは、憲法で保障された健康で文化的な最低限度の生活に資するものなので、これは公共で保障する。逆に図書館がなければ、末端ほど、辺境ほど、絶対に売れるものしか置かなくなってしまいます。それはそうです。市場原理からすれば、末端ほど、辺境ほど、遠いところほど、在庫のコスト、流通のコストが掛かるから絶対に売れるものしか置かなくなってきます。だから、末端ほど、辺境ほど、市場原理は荒々しく働きます。

私たちは発想を変えなければいけないのです。今まで私たちは、地方はのんびりしていて、経済的には少し大変でも人情豊かで住みやすくていいと思っていたわけです。でも、そこに市場原理が入ってくると、いっぺんにそういうものが根絶やしになってしまいます。免疫のないところにインフルエンザが入ってくるようなものです。

特定の企業の名前を挙げるのはあまり良くないかもしれませんが、私たちのまちづくりの業界では、イオンは無邪気に出店して、無邪気に退店すると言われています。十数年で退店してしまうケースがたくさんあります。最短で3年で退店したケースがあります。だからあんなにイオンは安普請<sup>やすふしん</sup>なのです。地方

都市にある銀行や昔ながらのデパートは、石造りでものすごくしっかりした建物になっています。地域で50年、100年商売するつもりだったら、あんな安普請の建物を建てません。撤退することまで計算に入れて建物を建てているから、ヤマダ電機やイオンはプレハブみたいな建物なのです。

例えば、私の母のふるさとは秋田県の大館というところで、ご承知のように東北地方は農村地帯だったので、JRの旧国鉄の駅と中心市街地が離れているところが多いです。仙台も盛岡もみんな離れています。大館もそうなのです。中心市街地商店街が大館駅と離れたところにあります。たまたまその間にイオンができました。中心市街地は壊滅状態になりました。通行量が減りました。イオンが退店しました。何も残りませんでした。ぺんぺん草も生えませんが、イオンは全く悪気がありません。イオンは通行量調査で、統計で出店して統計で退店していきます。これが市場原理です。市場原理自体には悪気はないのです。まちをつぶそうと思って出店しているわけではありません。今、こういう状態が全国に広がっているということです。

大阪は大都市圏ですから、これとは違う様相があると思います。でも、皆さんも身近でこういうことを経験しています。郊外型のショッピングセンターには大規模書店が必ず入っています。こういう書店は本の並びが日本中一律なのです。POSシステムというコンピューターシステムでつながっているので、レジに近い方から売られている本が並んでいます。要するに、私たちは市場原理によって思想統制されているのです。

昔であれば、岡山や高松ぐらいの県庁所在地レベルのまちだったら、ちょっと並びの変わった本屋さんや、雰囲気のある古本屋さんが必要がありました。大体そういうところの店主は、東京でアングラ演劇の映画に出ましたみたいな方が戻ってきて、親の代を継いで本屋をやっているわけです。商店街というのはもともとポテンシャルがあるところで、家賃を払わないでいい商売なので、昔は日銭が入ればやっていけたのです。だから昔は本屋さんは雑誌だけ売っていれば、あとはちょっと偏った趣味の本など、好きな本を売って、それで商売が成り立ったのです。古本屋さんもそうです。

でも皆さん、雑誌はコンビニで買うでしょう。本はAmazonでも手に入ります。だから、そういう変わった本屋さんや雰囲気のある古本屋さんも、大阪や東京のような大都市圏でしか成立しなくなっているのです。では、地方

都市にそういう本屋さんが必要なのかというと、恐らくそういう本屋さんが地方都市の文学少年や文学青年を育ててきたのではないかと思います。立ち読みしていると、普段無口なおやじが寄ってきて、「おまえもいい歳なんだからそろそろツルゲーネフでも読めよ」「もうそろそろドストエフスキーだろう」と声を掛ける。それは別に本屋さんだけではなくて、画廊やジャズ喫茶や写真館など、そういうところが本来は地方の小さな都市の文化を支えてきたのですが、今はそういうものを地方都市が許容できなくなってしまいました。地方ほど無駄を許容することができなくなってしまったのです。本来は地方ほど無駄なものがたくさんあるはずだったのですが、今は無駄が許容できるのは大都市圏だけになってしまいました。

ちなみに昨年、フランスは通称「Amazon禁止法」と呼ばれる法律を国会で通しています。これはインターネットで購入した書籍を無料で郵送してはいけないという法律です。この法律一つで、Amazonのビジネスモデルは崩れるのです。これはフランスが全国に4,000あるといわれている地方都市の小規模書店を守るための法律なのです。書店というのは、ただ単に本を販売するところではなくて、そのことによって地方の文化を支える重要な文化拠点なので、これをフランスは守るのだという法律を昨年通しました。今の日本の規制改革の方向と真逆になっていることが分かります。昨年、第3の矢の大きな目玉として、インターネットでの薬の販売が許可されるようになりました。全てが許可されると、いずれ地方の薬屋さんはつぶれるでしょう。

郊外の都市にお住みの方は分かると思うのですが、地方都市にとって薬局はただ単に薬を売る場所ではないのです。お年寄りやご病気の方が薬屋さんに通うことによって、健康のチェックを受けているわけです。「あれ、いつも薬を買いにくるおばあちゃん、来ないけど大丈夫かな」という機能を必ず持っているのです。おじいちゃん、おばあちゃんが薬屋さんでちょっとしたコミュニケーションをすることがとても大事なのです。それは医者に行くよりも少しハードルの低い、非常に重要な医療機関なのです。でも、市場原理に任せると、多分なくなってしまいます。それでいいのでしょうか。

例えば、こういうこともあります。かつて、もう15年ほど前に、ある雑誌が「なぜ青少年の凶悪犯罪が全国に、地方都市に広がっていくのか」という特集を組みました。ちなみに、青少年の凶悪犯罪は数的には減っているのです。ま



まだまだ日本は治安のいい国で、減っているぐらいです。ただ、問題は地方都市に広がっているということです。地方出身の方は想像できると思うのですが、地方都市の普通の平穏なまちでいきなり凶悪犯罪が起こると、地方の方たちのショックが本当に大きいのです。幾つか理由が書かれているのですが、一つは地方ほど若者の居場所が閉塞化して固定化しているということです。要するにドロップアウトしたような若者の居場所が、せいぜいネットカフェとゲームセンターとカラオケボックスぐらいしかないのです。カラオケボックスは最も象徴的です。遮音防音がしっかりしていて、外から全く見えません。かつての銭湯のような学年を超えた交流もない。そういうところがいわゆる不良少年たちのたまり場になって、いじめや犯罪の温床になっているのではないかとわれています。例えば関西圏では、尼崎の悲惨な事件がありました。マンションにたくさんの若者が出入りしていて、凄惨なリンチ事件が起きました。あれと似たような事件が愛媛県の伊予市でも起こります。居場所のない若者がマンションなどをたまり場にするということが、今どきの地方都市でも起こりつつあるのです。局所的にある種のスラム化が起こりつつあります。それが一つ問題です。

あるいは別の理由も考えられます。若者の成功の筋道が一つで、そこから離れるとなかなか元に戻れません。東京や大阪のような大都市圏だと、フリースクールなども完備されてきて、不登校になっても親があまりじたばたしなければ、そんなに大きな問題になりません。今、全国で不登校の子どもたちの大学進学率はものすごい勢いで上がっています。いろいろなバイパスができていますので、不登校になってもほとんどまた戻れるのです。ところが、これも地方出身の方は分かると思うのですが、地方はまだまだ世間の目も厳しいので、「あそこのお子さん、高校行っていないらしいわよ」と言われて、どんどん引きこもってしまいます。不登校や引きこもりの問題も、人口20万～50万人のところが一番深刻だといわれています。それより小さいとまだコミュニティが残ったりしています。それより大きいと、無名性の中に埋もれて、そんなにプレッシャーにならないのです。一番きついのが、中規模な県庁所在地レベルの人口30万人ぐらいのところだといわれています。

#### 4. 広がる文化資本の格差

これはただ、引きこもりや不登校の問題だけではありません。エリート層で

も同じような問題が起こっています。今、東京の中高一貫校では、東大に何人入るかなんていうことはほとんど競っていません。どの学校も大学に入ってから学びのモチベーションが持続するような授業をしますということで、最近の言葉ではアクティブラーニングと呼ばれるワークショップ型の授業や参加型の授業がたくさん増えています。

私は東京の駒場で生まれ育って今も住んでいるので、地元で筑波大学附属駒場という年間100人以上が東大に入るスーパーエリート校があるのですが、この国語の先生方と毎年、最先端の国語の授業をつくるのです。例えばある年は、中学3年生の夏休みに、永山則夫死刑囚が書いた小説を3冊読ませて、後期半年かけて永山則夫の評伝劇をつくります。それだけなのです。もう教科書なんて使わないのです。そんな授業をたくさんやっています。

これは中高一貫だけではなく、今、秋篠宮さまのご長男が行っているお茶の水附属は、私たちの業界で最もとんがった授業をする学校の一つとされています。小学校3年生から「市民」という科目があるのです。5～6年生になると、例えば日韓併合の歴史を教えて、日本人と韓国人のそれぞれの立場に立って劇をつくるような授業を普通に行っています。そういう面白い授業をたくさんやって東大に入った子たちと、以前、世界史の未履修問題がありましたが、今でも普通に地方の進学校では行われていて、受験科目だけ勉強してきてやっと東大に入った子たちが机を並べて、文字どおりのカルチャーショックを受けて、不登校になってしまうということが、東大でも京大でも阪大でも毎年一定数あるのです。

僕は阪大大学院の教授だったので、この話を授業ですると、最後にクエスチョンシートを書いてもらうのですが、感想のところ、「私もそうでした」と書く子が必ず一定数いるのです。大学1年で、例えば和歌山などの地方の進学校から来て、宇宙人と話しているみたいで、何を話しているか全然分からない。特に女子に多いのです。東京の桜蔭、雙葉など、御三家と呼ばれるところは、家が富裕層だということもあって、コンテンポラリーダンスは観に行く、ミュージカルは観に行く、夏休みはニュージーランドに2か月ぐらい留学する、ファッションセンスはいい。そういう子たちと、おまえは勉強だけすれば東大も京大も行けるからと一生懸命勉強だけさせられてきた子たち。18歳の女の子からしたら、今まで私は何をやってきたのか、人生返してよと思います。

阪大でもっと面白い子がいました。ガリ勉してやっと阪大に入って、彼氏ができました。彼氏は大阪出身で、悪い意味ではなくすごく遊んでいる人で、コンサートや美術館など、毎回いろいろなところに連れていってくれるのだけれど、18歳まで全くそういうところに行ったことがなかったので、どうやって楽しんでいいのか分からなくて3か月で別れてしまいました。かわいそうです。

こういうものを社会学の世界では「文化資本」と呼びます。文化資本というのは、厳密に言うと3種類あります。一つ目は、努力で獲得できるものです。学歴や資格です。二つ目は、経済力で獲得できるものです。書画・骨董や書籍などです。三つ目は、身体的文化資本と呼ばれるものです。これはしつけやセンスなどです。これは本人の努力ではありません。家庭環境など周囲の環境によります。今、文化資本の格差が非常に広がっているのだと思います。

これは二つの方法で広がるのです。一つは地域間格差です。東京は圧倒的に有利です。昨年度から東京都港区の子どもたちは、サントリーホールに小学校4年生が全員招待されるようになりました。昨年は大野和士が率いるリヨン歌劇場管弦楽団のコンサートが聞けました。港区の子どもたちにそんなことをする必要ないだろう、被災地の子どもでも招待してやれと思いますが、港区に悪気はないのです。サントリーホールがあり、地域関連の事業をやっているからやれるのです。圧倒的に東京は有利です。あるいは大阪も有利です。地方ではそのような機会はほとんどありません。

もう一つは経済格差です。今、教育面での経済格差が大きく問題になっています。教育再生会議の答申がまとまったというニュースが出ています。簡単に言うと、頭がよくても貧乏な家の子は塾に行かせられなくて、なかなか進学の際にも恵まれないという状況が出てきます。ただ、教育の格差はまだ発見できるのです。学校に来たら、本当に頭が良ければ、この子は頭がいいのに家が貧乏でかわいそうだなと思って、みんな助けてあげるし、奨学金の制度もいろいろあります。

文化の格差は発見されないのです。親がコンサートや美術館に行く習慣がなければ、子どもは絶対に行きません。子どもだけで行く場所ではないからです。これはスパイラル状に開いていってしまうのです。しかし、今は企業でも何でもセンスのいいやつから採用していくのです。教育の格差だけではなく、文化資本の格差によって人生が決定されるような世の中になってきています。

この決定打は6年後に行われるといわれている大学入試改革です。センター試験が廃止されて、1次試験はざっくりとした基礎学力を問ひ、2次試験は各大学で潜在的な学習能力を問うユニークな試験をしなさいというのが文科省の方針です。恐らく京大、東大、阪大クラスで、面接だけやって終わりという大学はないと思います。最低でも集団ディスカッションがあります。できればアウトプット演劇などを要求します。オックスフォードやケンブリッジだと、ある年の入試は「8人でレゴで巨大な戦車を作れ」という試験が出るのです。これはすごく大変です。設計もできなければいけないし、作業工程の順番も考えなければいけないし、地道な作業をいとわないような献身的な努力をしなければいけないのです。あらゆる人間性を問うような試験なのです。

僕は阪大大学院で入試担当だったので、世界中のエリート校の入試を調べたのです。そうしたら出題担当者が口をそろえて言うのは、「受験対策ができないような問題を毎年考えるのが大変だ」ということです。逆に言うと、今までの高校の先生の受験指導が一切きかなくなるのです。小学校から地頭を鍛えるようなアクティブラーニングを積み重ねていかないと、少なくとも東大や京大や阪大には行けなくなります。今、教育の世界で一番心配されているのは、大学入試改革の方向は間違っていない、でも恐らく地方は追いつけないということです。東京の中高一貫校と灘ぐらいの子しか東大に行けなくなります。日本は140年かけて教育の地域間格差が非常に少ない国をつくってきたにもかかわらず、文化格差によってもう一度格差が広がってしまうのです。これは社会を不安定にさせます。

今、安倍内閣は努力をすれば報われる社会をつくりたいと言っています。これは正しいです。安倍内閣を批判する人は、そうはいつでもスタート地点が違うのだから、努力をすれば報われると言っても平等になっていないじゃないかと言います。これも正しいです。そこで語られているのは大体経済、貧困のことです。しかし、もう一つあります。問題は文化格差なのです。こちらの方が発見されにくいからもっと深刻なのです。文化格差の広がりによって、努力しても報われない社会になっているのです。努力しても獲得できない、家庭環境などで完全に決定される身体的文化資本が一番大事である以上は、この格差をなくさない限りどんどん格差は広がっていきます。このことはほとんどの人が触れていないし、政策にはまだ全く落とし込まれていません。でも、ここを注

意しないと、恐らく日本は相当不安定な社会になっていくだろうというのが私の基本的な考えです。

## 5. 重層性のない社会の中で

話を元に戻します。青少年犯罪の問題はもちろん地方都市だけではありません。ここからは大阪の皆さんにも関係あることです。私は渋谷から歩いて15分ぐらいのところにある駒場で生まれ育ち、子どものころはずっと渋谷が遊び場でした。渋谷は今でこそ修学旅行生がみんな集まるように、若者のメッカと呼ばれるまちになっていますが、僕が子どものころは汚い小さなまちでした。「渋い谷」と書くぐらいですから、坂に囲まれた小さなまちなのです。これを東急と西武という二大資本の力で無理やり広げたのが今の渋谷の形なのです。それはいいです。みんな賑やかになって、経済的にも豊かになります。でも、その結果、谷底のセンター街では、今はいませんが、チーマーと呼ばれる不良少年が地べたに座っている非常に危険なまちになってしまいました。一説によると、新宿の歌舞伎町より危険だといわれています。

新宿は組織犯罪なのですが、渋谷は個人犯罪なので、いつどこで襲われるか全く予想ができません。僕は帰り道なので渋谷をよく歩いているのですが、地べたに座っている子たちを見ると、これはこの子たちの責任じゃないだろうといつも思うのです。渋谷は資本の論理だけでまちを広げてしまったために、ヨーロッパのまちなら必ずあるような、噴水のある広場や公園が一つもないのです。宮下公園が山手線沿いにあるのですが、ここはこの十数年ホームレスたちのたまり場になっていて、若者は全く寄りつけない状態です。

渋谷は、都市計画なしにまちを広げてしまったために、社会的弱者の居場所が全くないまちになってしまったのです。でも、社会的弱者は、富に吸い寄せられるように集まってきます。その集まってきた居場所がない社会的弱者が右往左往することによって、どんどんまちの危険度を高めてしまったのが渋谷の現状なのです。

皆さんはその結末を二つ、ワイドショーを通じて見えています。一つは、渋谷区が宮下公園のネーミングライツをナイキに売って、スポーツ公園化して一部有料化したことです。社会的弱者の居場所のないまちをつくっておきながら、さらに公園を一部有料化したのです。結局ホームレスたちとその支援団体と折

り合いがつかずに、行政代執行で警察権力を導入して立ち退かせました。でも、排除の論理では何の解決にもなりません。今、渋谷中にホームレスが広がって大変なことになっています。半蔵門線から109に上がっていく途中は地下2階で二層になっているのです。夜の8時過ぎに109が閉まると、そこからホームレスたちがコンコースに押し寄せます。異常な風景です。日本で最も有名なファッションビルのお膝元に、ホームレスたちが大量に集まるのです。そういうまちになってしまいました。

もう一つは、皆さんよくご存じの海老蔵事件です。渋谷のチーマーが成人して六本木に流れて、元暴走族とくっついて、半グレと呼ばれるやくざより怖いといわれる反社会的集団を生み出しました。そして海老蔵事件を起こし、2年前にはクラブで人違いの殺人事件まで起こしてしまいました。こうなってくると、渋谷は賑やかになったのだから、そういうやつらが出てくるのもしょうがないというレベルではないです。都市政策の失敗は、そのような反社会的集団まで生んでしまいました。

この渋谷の話は、皆さんにとって遠いイメージかもしれませんが、東京の東村山という近郊都市で中学生がホームレスを撲殺してしまったという事件がありました。寒い冬の2月ぐらいだったと思います。やはり居場所がなかったのだと思います。ホームレスも中学生も図書館にいました。残念ながら、日本の図書館はまだまだコミュニティースペースではないのです。学びの場所です。だから静かにしなければいけません。そこで中学生が騒いで、それをホームレスがたしなめて、中学生が逆恨みして塾の帰りにバットでホームレスを撲殺してしまいます。これは明らかに中学生が悪いです。悪いですが、その背後にはそういった弱者の居場所をつくってこなかった日本の都市政策の無策があるのです。

いじめの問題を短絡的に考えるのは良くありませんが、まちづくりの視点から見るとこういうことが言えると思うのです。昔も学校でいじめはありました。でも、昔は子どもたちの居場所が学校だけではなく、「ドラえもん」に出てくる原っぱみたいな世界がありました。原っぱでもいじめはあります。ジャイアンのような子がいていじめているのですが、こちらは学年を超えた交流なので、ガキ大将は自分の子分がいじめられていると分かるし返しに行ったりします。でも、今は子どもの居場所が学校しかないから、学校でいじめられると完

全に行き場を失ってしまって、あっけないほどすぐに不登校になって、引きこもったり、極端な場合は自殺に走ってしまう。今、子どもたちの世界にガキ大将という言葉も仕返しという言葉もないのです。

大人も子どもも、こういった重層性のない社会はとても生きづらいです。人間は幾つかのコミュニティーに所属することによって、精神的な均衡を保つようにできている生き物なのです。およそあらゆる生物で人間だけが、家族という集団と群れという集団の両方に所属します。ゴリラは家族単位で行動します。チンパンジーは群れ単位で行動します。人間だけがその両方に所属します。だから私たちはこんなにコミュニケーションを必要とするのです。それはそんなに難しい話ではありません。

例えば、昔は学校に行って、同学年の友達とわいわい遊ぶ。そこで嫌なことがあっても、原っぱに行くと優しいお兄さん、お姉さんが待っていて、遊んでくれる。原っぱで何かあっても、家に帰ると弟、妹がたくさんいるから、しっかりしなければいけない自分になります。そのように、同世代と遊ぶ自分、甘えられる自分、しっかりしなければいけない自分と、いろいろな社会的な役割を演じることによって社会性を身に付けていくのです。学校だけで社会性は身に付かないのです。

あるいはこういうこともあります。軽度のアスペルガーの子どもは同世代と遊ぶことが一番苦手です。役割が決まっていれば大丈夫なのです。だから大人とはきちんと話せるという子が結構いるのです。敬語はすごく使い方がうまい。でも同世代ときちんと話せない。同世代は友達の付き合いなどで役割がどんどん変わります。そういうことが苦手な子が一定数いるのです。そういう子たちも昔は原っぱに行けば安心できました。しかし、そういう場所がなくなってしまうました。要するに重層性のない社会です。大人で言えば市場原理だけの社会です。市場原理だけの社会ではとても息苦しくなってしまうということです。

## 6. 新しい原っぱをつくる

では、原っぱをつくれれば子どもは戻ってくるかという、戻ってきません。日本の子どもは、塾だ、家庭教師だ、習い事だ、ゲームだと世界で一番忙しいです。そこで私たちがやらなければいけないのは、現代社会に合った、市場原理とも折り合いがつくような新しい広場、原っぱをつくっていくことなのです。

その一つが、例えば私が仕事をしているような劇場や音楽ホール、美術館などかもしれないし、フットサルのコートかもしれないし、ミニバスケートのコートかもしれないし、図書館かもしれません。

図書館はこれから非常に重要な役割を果たしていきます。引きこもりの方で、コンビニと図書館なら行けるといって人が一定数いるのです。図書館に来てもらったときに、今までは静かにしていなければいけなかったけれど、スペースを区切って、防音・遮音して、ここは話してもいいという談話室をつくって、できればそこにカウンセラーやボランティアを配置して、大人とも話せるようにします。同世代とは話せないけれど、大人なら話せるという人もいます。

それで話せるようになったら、次に絵本を持ってきて、じゃあちょっと子どもにも読み聞かせでもやってみないかと社会参加を促す。これが居場所と出番という考えです。社会弱者の居場所をつくって、さらに社会参加を促す。今までの日本の行政とほとんどの地方行政は、居場所づくりと出番づくりを別々にやっているのです。それは一体化しなければいけません。もし一体化するとすれば、これからの公共文化施設の役割は非常に大きくなるのです。そのときに行政がしなければいけないのは、できるだけいろいろなメニューを用意することです。価値観が多様化しているから、できるだけいろいろなメニューを用意するのです。もちろん行政がきめ細かくいろいろなメニューなど用意できないので、NPOの力も借りて、それを支援するような形にします。誰かが誰かを知っているような社会をつくっていくことが大事です。

今までの日本の共同体は稲作文化で、稲というのは、みんなで田植えをして、みんなで草刈りをして、みんなで稲刈りをしないと収量が上がらないという特殊性を持っています。南方由来の稲という作物をこういう地方で作るために、みんなで努力しないといけないのです。麦は家族経営でできるのですが、稲は村落共同体でみんなで頑張らなければいけません。私たちは非常に強固で小さな強い共同体をつくっています。でも、今どんな地方に行っても、若者はその地域で生まれたからといって、青年会に入り、商工会議所に入り、消防団に入り、夏は盆踊りだ、秋は祭りだ、冬は餅つきだ、春は福引だとか、全部の行事に参加させられるような強固な共同体はうんざりなのです。だから、みんな都会の無名性に憧れて大都市に出ていくのです。

でも、どんな統計調査を見ても、芸術文化活動、環境保護運動、スポーツ、



ボランティア活動といった、自分から主体的に参加したいと思うアクティビティに関しては、車で30分圏内ならば人々はストレスなく移動するといわれています。だから、今の行政区画を少し緩めても、30分圏内なら移動するので、その分たくさんのメニューを用意して、何かに参加してもらおうような形にした方がこれからの文化政策は有効です。

「あのおじいちゃんは気難しそうに見えるけど、ボランティアをやらせたらきめ細かいんだよ」「あのブラジル人はいかつくて怖そうに見えるけど、子どもにサッカーを教えるのがうまいんだよ」といったように、誰かが何かのアクティビティを通じて、誰かを必ず知っているような緩やかな社会、緩やかな共同体に日本社会は編み替えていった方がいいのではないかということです。

今までは、誰もが誰もを知っている強固な共同体をつくらうとしていました。どの自治体もそういう共同体を目指しているのです。みんなで頑張る、みんなで一生涯懸命やる、みんな一体型。でも、もうそれは無理でしょう。自治体職員の方皆さんの方が感じていると思うのです。特に大阪のような都市圏ではそんな社会は無理なのです。そうではないところで、でも何かでつながっているという緩やかなネットワーク社会の方が、僕は少なくとも大都市圏においては持続可能な自治体になっていくのではないかと思います。

人口3,000人、5,000人の小さな村ならいいです。全員で消防活動、全員で防犯活動、全員で子どもの教育に取り組みます。それしかないからです。でも、それは皆さんのまちでは無理です。だったら、もう少し緩やかな形でコミュニティをつくっていった方がいいのではないのでしょうか。もしそうであるならば、そのように日本社会を編み替えていくなれば、編目の接点に例えば演劇があったり、音楽があったり、美術があったり、コーラス活動があったり、ボランティア活動があったり、フットサルがあったり、ミニバスケットがあるといったように、何かで誰かがつながっているということが大事なのです。

皆さんご承知のように、阪神・淡路大震災の際に、神戸市あるいは兵庫県は全く経験がなかったために、避難所から仮設住宅、仮設住宅から復興住宅への移転を、高齢者、障がい者優先で、あとは抽選でスピーディーに行うということをしました。これは当時の行政としては決して間違った判断ではなかったと思います。でもその結果として、コミュニティが寸断され、数字に残っているだけで四百数十名、実質は1,000人以上の孤独死、孤立死を生んでしまいま

した。人間は共同体から切り離されてしまうと、あっけなく生命力が弱ってしまうのです。毎朝、挨拶をしていたおばあちゃんが、仮設住宅、復興住宅に入った途端に1日も話さなくなります。1週間誰も話さなくなるという状態が神戸では実際にありました。今は皆さん経験を積んでいますから、巡回したり、見守りしたり、システムとしては相当発達してきましたが、NPOささえなかった時代なので、当時そんなものはありませんでした。

新潟県中越地震のときにはその教訓から、山古志村なら山古志村でみんなで仮設住宅に入り、みんなで戻るといことにしました。ただ、東日本大震災はあまりに広範囲だったため、それさえもできずに今の状況に至ります。コミュニティーを優先するのか、復興のスピードを優先するのか、いまだに各自治体が苦しんでいるというのが東日本大震災の状況です。

共同体というのは、人間の生命力の大きな要素なので、これを寸断させることはできません。でも、昔ながらの強固な共同体ももうありません。そうすると、どうにかして、もう少し別の新しい共同体のつくり方をしない限り、持続可能な自治体にはなっていないのではないかとことです。

## 7. 行政の役割は文化的社会包摂

僕は演劇をやっている人間なので、そういうときに芸術の役割は大きいと思うのですが、別にこれは夢物語で言っているわけではありません。1980年代以降、欧米の多くの都市は、文化による都市の再生に取り組みます。例えばアメリカでは、道を曲げたり、大きな駐車場を造ったり、トラム（路面電車）を走らせたり、弱者に優しいまちをつくっていきました。その中で多くのまちが、まちの真ん中にアートセンターをつくりました。アートセンターをつくる時には、確実に社会的弱者が社会参加をしやすいような施設にしていくのです。よく劇場は非日常の空間といわれますが、おばけ屋敷みたいなものが非日常の空間ではないのです。経済活動では出会うはずのない人を出会わせるというのが非日常の空間です。演劇を通じて中学生とホームレスが出会う、音楽を通じてシングルマザーと障がい者が出会う、美術を通じて外国人労働者と高齢者が出会うという場所にしていかなければいけないのです。

最も象徴的なのは、ヨーロッパの美術館やコンサートホールでよく行われているホームレスプロジェクトというものです。これは、1か月に1回ぐらいホー

ムレスたちにシャワーを浴びてもらって、バザーで集めた服に着替えてもらって、美術展やコンサートに招待するのです。先進国のホームレスは生まれつきホームレスなわけではありません。何らかの理由で社会からドロップアウトしてしまっています。もちろん一番の理由は経済ですが、経済だけならホームレスになりません。それなら生活保護を受ければいいのです。精神的な理由が必ずあります。そのときに芸術、文化でもスポーツでも、何かに触れてもらうことによって、100人のうち3人でも5人でも、「ああ、子どものころ母親と一緒にコンサートに行ったな」「うちのおやじは、ああ見えて映画が好きだったな」など、生きる気力、労働力を少しでも取り戻してもらえれば、非常に安上がりなホームレス対策なのです。炊き出しだけでも、命は救えるかもしれませんが、先進国のホームレス問題は常に精神面が付きまとうので、そちら側を同時に解決していかないと根本的な対策にはなりません。

あるいは、こういうこともあります。私は駒場でアゴラ劇場という小劇場を経営しているのですが、6年ほど前から雇用保険受給者、失業した方に対しての大幅な割引を実施しています。これはヨーロッパの劇場や美術館で必ず行っている施策ですが、日本の公共施設で行っているところはほとんどありません。ゼロだと思います。日本はどちらかというところ逆の施策をしてきたのです。平日の昼間に雇用保険受給者や生活保護世帯の人が劇場や映画館に来たら、求職活動を怠っているという雇用保険を切ってしまう施策をしてきました。それも根拠があったのだと思います。高度経済成長の時代は景気変動の波はあっても、半年頑張れば必ずみんな就職できたのです。今の雇用政策はいまだにその時代の制度設計のままなのです。でも、今の問題は先が見えないということです。

皆さんも福祉系の部署にいた方は分かると思うのですが、雇用保険をもらったから半年遊ぼうなんて方はほとんどいなくて、日本人は真面目だからみんな最初のうちはハローワークに一生懸命通うのです。でもなかなか自分に合った仕事がない。すると、自分が社会に必要な存在ではないかと思ってしまうのです。どんどん精神的に落ち込んでしまいます。世間の目も厳しくて、「あそこのおじさんは会社に行っていないですよ」と言われます。それでどんどん引きこもってしまうのです。

今、日本社会が抱える大きな問題の一つは、中高年男性の引きこもり、そして孤独死、孤立死です。行政の方はご理解いただいていると思うのですが、孤

独死、孤立死は社会全体にとっても非常に大きなリスクとコストになります。部屋の臭いはひどい、周りの人のショックは大きい、その部屋は誰も住まなくなる、近所の人さえ引っ越してしまう。そうすると、これは勝ち組であるはずの不動産所有者にとっても個人では負えないようなリスクとコストになります。私たちは、今までは「失業しているのに昼間に映画館なんか来て。芝居なんか観にきて」だったのを、「失業しているのに劇場に来てくれてありがとう。社会とつながっていてくれてありがとう。その方が最終的に社会全体のリスクもコストも軽減するからね」というふうな考え方を変えていかなければいけません。これが「文化流社会包摂（ソーシャルインクルージョン）」の考え方です。反対は「社会的排除（ソーシャルエクスクルージョン）」です。排除だけでは全く問題は解決しません。そして持続可能な社会になりません。

日本は地縁血縁型の社会でしたが、戦後どんどん崩れてきました。それを補完するのが企業社会でした。社宅に住んで、社員運動会を楽しみ、社員旅行に行き、企業年金に守られて生きてきました。公務員も同じです。しかし、1990年代以降、日本の企業はグローバル化する中で、労働者を守る必要が全くななくなってしまいました。企業社会は壊れていきます。そこで振り返ると、地縁血縁型社会ももうありません。今の日本は人間があっけなく孤立化しやすい社会になっているのです。

繰り返し言いますが、人間は孤立してしまうと非常にあっけなく生命力が弱まります。そして最終形として、孤独死、孤立死があります。しかし、孤独死、孤立死は、行政にとっても社会全体にとってもものすごくコストが大きいです。だから人間をどうにか社会につなぎとめておかなければいけません。これが社会包摂という考え方です。これからの行政の大きな役割はどうやって地域住民を社会につなぎとめておくかです。もしそうであるとするならば、広い意味での芸術文化の役割は非常に大きいです。別に演劇でなくても、音楽でなくてもいいのです。インターネットでも何でもいからとにかく社会とつながってもらおうのです。もちろんボランティア活動などでつながってもらえれば行政としてはものすごくありがたいです。これが社会包摂という考え方です。そうであるとするならば、これからの文化行政、文化政策の役割は非常に大きく変わってくるのではないかと思います。

ただ、こういう話を阪大ですると、阪大生は真面目なので、「これで本当に

社会が良くなるのですか」と言うのですが、ここまで話しておいて身もふたもない言い方ですが、これで社会は良くなりません。これは守りの政策なのです。でも、やらざるを得ないのです。例えば、私がよくフランスで仕事をするジュヌピリエ国立演劇センターはパリの西側の郊外にあります。パリの西側から北側是最貧困地区です。よく暴動が起こって、車が焼かれた映像などがニュースで流れる地帯です。まちを歩けば全員がアフリカ系の移民です。

ジュヌピリエ国立演劇センターの1階は出入り自由のカフェで、マッキントッシュのコンピューターが10台ぐらい置いてあって自由に使えます。夕方3時ごろになると子どもたちが集まって、ずっとマックのコンピューターで、ゲームをしたり、ちょっとHなサイトを見たりして遊んでいます。その子たちは全然劇場と関係ありません。でもそれでもいいのです。その子たちは一歩外に出たら、薬物汚染や青少年犯罪が待っているからです。「劇場に来てくれてありがとう」なのです。劇場に来てくれさえすれば、長期的に見れば社会的なコストは下がるのです。その中で、毎日来る子には「ちょっとヒップホップのワークショップがあるのだけれどもやってみない？」と、社会参加に少しずつ誘っていくのです。

今ヨーロッパの多くの公共文化施設の役割はそこにあります。社会包摂的な機能を持っていない公共文化施設はもうあり得ません。これは強欲資本主義でもない、福祉のばらまきでもない、恐らく日本の市民社会に残された最後の選択の道だと僕は考えます。そのときに文化の役割は非常に大きいのではないかと思います。

## 8. 各地の文化政策の成否

ただ、これは守りの政策で、これだけできるとは思いません。もう少しポジティブな話もしたいと思います。そう言いながらいきなりネガティブですが、観光学の世界で「大阪病」という言葉があります。大阪は「万博」の成功体験があまりに強かったために、外からの集客に頼るような行政、施策をずっとしてきました。「花博」があったのはバブル期だったため、企業協賛金が多く集まり、失敗した博覧会なのだけれども黒字になってしまいました。

大阪の衰退は1980年代から始まっています。どんどん本社機能が東京に移転していきました。あまりに大きいので誰も言いませんが、新幹線による最大の

ストロー効果です。例えば、秋田市は完全にストロー効果で、最初だけ賑わって、買い物は盛岡や仙台に行ってしまう。大阪も全く同じなのです。昔は東京と大阪がものすごく遠かったから本社機能を移転できなかったけれど、新幹線ができたおかげで本社機能を移転しても全く大阪の企業が不自由しなくなってしまったのです。これは日本の縮図です。もう衰退が始まっていたのに、過去の成功体験にすがり、問題を先送りしてしまったのです。その結果どうなったでしょうか。オリンピックは来ず、サミットも来ず、せっかく呼んだ世界陸上は尻すぼみに終わり、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンは今は頑張っていますが、一時期本当に大変でした。西のディズニーランドと違って華々しくオープンしましたが、今はそのように呼ぶ人は残念ながらいません。

ユニバーサル・スタジオ・ジャパンとディズニーランドはどこが一番違うのでしょうか。観光学の世界では「同心円状の集客」という言葉があります。ディズニーランドは浦安市民が年間パスポートを一番持っています。あるいは千葉県民が年間パスポートの保有率が一番高いです。浦安市民はディズニーランドをととても誇りにしているので、全国から友達や親戚が来ると一緒に行くのです。「私、このアトラクション飽きたから行ってきて。レストランで待っているから」「このアトラクション一緒に行くわ」と、みんなで行くのです。ユニバーサル・スタジオ・ジャパンは、若い人は行くけれど、大阪の人たちは「暑いから行ってきて」と言って行きません。

リピーターが来にくい構造になっているのです。そのためにいろいろなアイテムを投入しました。今行くと、ハローキティや進撃の巨人など、ユニバーサルスタジオと関係のないキャラクターがたくさんいます。あれはユニバーサル・スタジオ・ジャパンではありません。ただのジャパンです。そのために、結局ユニバーサル・スタジオ・ジャパンのブランドイメージが下がってしまったのです。だからいつまでたっても大阪の人に愛されません。誇りになりません。残念ながら、それはディズニーランドとの決定的な違いです。僕は両方に住んでいます。東京で暮らして阪大にいます。やはり若者のディズニーランドに対するメンタリティーと、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンに対するメンタリティーは全然違います。テーマパークのような大きな施設でも、地元にも愛されない限り絶対に成功しません。これが「同心円状の集客」です。

しかし、もちろん大阪も失敗ばかりではありません。一番成功したのは、天

満天神繁昌亭です。天神橋筋商店街の旦那衆が2億円の寄付を集めて、空いている天満宮の境内の駐車場に60年ぶりに寄席を復活させました。それを当時の桂三枝上方落語協会会長が粹に感じて、吉本と交渉して若手の噺家のスケジュールを花月よりも繁昌亭を優先させました。200人の小さな寄席です。逆に言えば、そのような小さなスペースであれだけの有名な噺家さんたちの話を聞いているのは楽しいです。満員です。1か月先まで切符が取れません。200人ですから、年間の動員数は十数万人、甲子園球場3試合分です。

でも、これが成功したおかげで、もともと元気は良かったのですが、今は天神橋筋商店街は1日に2万5,000人、年間1,000万人が通る日本で最も元気の商店街といわれています。まともなイベントも少し始めましたが、くだらないイベントをたくさんやっています。なぜこうなったかということ、繁昌亭に来る若手の噺家さんたちが天神橋筋商店街の居酒屋で飲むようになり、そこに若旦那衆が合流して、毎晩のようにばか騒ぎを繰り広げます。そこでいろいろなアイデアが出て、それが翌月ぐらいにイベント化されるのです。

これが多分、文化施設が地域で果たせる最も重要な役割です。まちを元気にするのです。芸術家がいることによって、いろいろな発想が出てきて、地域の人たちが自立的に自分たちのまちをどうするかという新しいアイデアを生み出せるようになるのです。今、行政は世知辛くなっていて、数字、数字と言いますが、文化施設は数字以上のものを地域に与えられるのではないかということです。

「水都大阪2009」の総事業費は9億円です。これは府と市と財界が3億円ずつ負担して行う予定だったのですが、当時の橋下大阪府知事が出さないと断っておおもめにもめて、アーティストたちが工夫して開催までこぎつけました。結果として100万人の予定が190万人来て、税込だけで6～7億円、一時波及の経済効果だけで70億程度という非常に成功した芸術祭になりました。反対していた橋下府知事は4回来て、最後は周りの県知事と呼んでいばったそうです。だったら最初から出せということです。これが成功したのは住民参加型だったからです。ワークショップなどが多かったので、夏休みの最初の方に来た子どもたちが、これは面白いと言って家族や友達をどんどん呼んできて、雪だるま式に動員数が増えたということです。

それに対して、全く同じ時期に横浜で「開国博Y150」が行われました。500

万人来る予定が124万人しか来ず、総事業費150億円で、横浜市は30億円追加で支出をしました。いまだに広告代理店と裁判になっています。失敗の理由は明らかです。バブルのころに行われた地方博を、電通、博報堂という広告代理店に丸投げで今どきやってしまったからです。横浜は「横浜トリエンナーレ」という素晴らしい芸術祭を持っていて、そこでは住民ボランティア、アートボランティアもたくさんいたにもかかわらず、全く住民参加の余地のない、そして横浜という民度の高い地域で、全く住民の誇りにならないお祭りを開いてしまったことで、悲惨な状態になって、市長は任期中に逃げてしまいました。逃げた市長が大阪市政に関わっていたわけですから、何なのだと思いますが、そういう結果になってしまいました。

今、全体として、博覧会から芸術祭へと移行しています。全部コンテンポラリーアートの祭典です。決して分かりやすいことをしているわけではありませんが、たくさんの人が集まるようになっていきます。芸術祭は一過性のもですが、固定的なもので一番成功したのは金沢の21世紀美術館といわれています。兼六園のすぐそばにあります。平成20年の年間入場者数は兼六園が180万人なのに対して、21世紀美術館は160万人です。ですから10人に9人は21世紀美術館に来るということです。今年は北陸新幹線開通でもっと人が増えています。

金沢市は兼六園というワンアイテムに頼っていた日本の典型的な観光都市です。1980年代以降、団体客の減少と、海外にお客さんを取られたことによって、どんどん宿泊施設が減っていました。平成14年に一度上がって、また落ちるのです。これは大河ドラマ「利家とまつ」が放送されたためです。でも、大河ドラマ効果は1年しか持たないのです。このままジリ貧で宿泊者数が200万人を切るのではないかとされていました。

ところが平成16年からV字回復して、平成19年の時点で「利家とまつ」の年を超えました。これは平成16年開業の21世紀美術館効果だろうといわれています。それ以外に要因がなかったのです。ここからは私の分析ですが、兼六園は午後5時で閉館です。21世紀美術館は6時まで開いています。カフェは8時まで、周りの交流ゾーンは10時まで入れます。金沢は寒いですから、午後5時まで兼六園にいる人はあまりなくて、昼間観光したら夜は和倉温泉や加賀温泉など、近くにいい温泉がたくさんあるので、そちらに一定数が流れるようになっているのです。しかし、夜までいられる場所があれば、観光客は滞留します。



それでこれだけの宿泊増になったのではないかと考えます。

少し遠い話になりますが、小澤征爾さんが音楽監督をなさったオーストリアのウィーンのアペラ座は、法律で毎日違うオペラを上演すると決められています。毎日違うオペラを上演するのはすごい努力です。ウィーンには世界中から音楽好きが集まってきます。普通に演劇を上映するように10日間や2週間興業していれば、観光客は1回見てウィーンは素晴らしいなと思って、次の日にはローマやパリに行きます。そこでも素晴らしいオペラが上演されているからです。でも、毎日違う演目が上演されていれば、ウィーンは最高峰ですから、観光客はずっとウィーンにいます。昼間はザルツブルクに行ってモーツァルトハウスを観たり、チロルの森に行って「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台を観たり、ミュンヘンまで足を伸ばして博物館を観たりしても、夜はオペラを観にウィーンに帰ってくるのです。宿泊すれば、富裕層ですから、1～2万円のオペラ座の入場料に加えて、おみやげも買う、食事もする、高いお酒を飲む、最低でも1日に5万円は支出するでしょう。ウィーンのアペラ座の収容人数は2000人ですから、1日で1億円、年間250ステージ上演すれば250億円です。そこでホテルやレストランの雇用も生まれます。そしてその雇用された人たちもまた消費します。2次波及、3次波及効果は数千億円といわれています。それだけの波及効果があれば、税金で毎日違うオペラを上演しても、ウィーン全体としてはペイするのです。

今、ヨーロッパは完全にLCCの時代です。関西国際空港もLCCでどうにか盛り返そうとしています。今時分パリに行くと、地下鉄の駅はLCCのポスターばかりです。パリーバルセロナ50ユーロ、パリーヘルシンキ70ユーロなど、ヨーロッパ域内どこに行っても100ユーロ（1万円前後）以内です。時間も1時間半以内です。ということは、移動のコストが掛からなくなるのです。だから、昼間にエッフェル塔に上って、夜にウィーンのアペラを観るということが普通にできるようになっています。

そこでヨーロッパの各都市は、昼間の観光ではお金が落ちないので、宿泊してもらうために文化的な施策を競っています。宿泊するかどうかは、夜の文化的な催しがあるかどうかで決まります。これはナイトカルチャー、ナイトアミューズメントといいます。昔は旅行するのは男だけで、財布も男が持っていたため、観光地のそばに歓楽街さえつくっておけばよかったのです。でも、今

は皆さん家族で旅行するでしょう。財布は奥さんが握っています。だから家族で楽しめる、子どもにも見せたい、教育的な意味のあるものが夜の時間帯にない観光地の宿泊者数は伸びないのです。だから、どこもみんなナイトアミューズメント、ナイトカルチャーを競います。

ここまで申し上げれば分かると思うのですが、大阪は本来はそういう施策を取るべきなのです。今からでも間に合います。これだけ数多くの世界遺産に囲まれているのですから、大阪は無駄な出費をしないで、文化予算を徹底的に出して、文楽をつぶすのではなくもっと繁栄させて、昼間は京都に行く、奈良に行く、高野山に行く、姫路城を見る、神戸で遊ぶ。でも夜は必ず大阪に帰ってきて、オペラやミュージカルや演劇や美術館に行くようにすれば、みんな大阪に泊まるのです。ヨーロッパの都市はみんなそういう政策をしています。大阪だけが、道頓堀に1,000mのプールを造るような無駄なことで、よそから人をどうにかしてお祭りで集めようという施策をいまだにしているのです。全く勘違いの方向です。既に大阪にはさまざまな文化施設もあるので、そこでソフトを充実させれば、十分にナイトカルチャー、ナイトアミューズメントのまちになることができ、経済波及効果も非常に高く、少ない財源の有効な投資になるはずですが、残念ながらそういう方向になっていないというのが今の大阪の状況です。

富良野もご承知のように北海道最大の観光都市です。都市の好感度は常に上位に入っています。今も外国の方がすごく多いです。韓国、台湾、香港、タイ、シンガポール、マレーシア、それから冬のオーストラリアからのスキー客です。富良野の観光アイテムは完全に脱「北の国から」です。富良野の観光アイテムは冬のスキーと初夏のラベンダー畑です。ただ、ラベンダーは最初から観光アイテムだったわけではありません。もともとは香水の原料だったのです。ところが、1970年前後に、香水の原料が全て人口香料に代わっていき、ラベンダーが要らなくなってしまったのです。ラベンダー畑がつぶされていき、耕地面積が激減します。そこで富田さんという変わった農家の方が、つぶすにしのびなくて、一面だけラベンダー畑を取っておくのです。それが旧国鉄のディスカバー・ジャパンのキャンペーンのポスターになり、そこから徐々に富良野がうわさになって、その後に富良野プリンスホテルができてスキー場が整備されて、そして「北の国から」の放送が始まって、一挙に富良野ブームに火が付くので

す。純農村がいきなり10年で観光地になったのです。

でも、それだけだったらさっきの「利家とまつ」と同じように、一過性のもので終わったかもしれません。その後で富良野の方たちは、香水工場見学やラベンダー摘み体験、ポップりづくりなど、参加体験型のものをたくさんちりばめることによって、今の観光地富良野を成立させたのです。

私はコミュニケーション教育がもう一つの専門で、縁あって十数年毎年呼んでいただいて、富良野市内の全ての小中学校で授業をしてきました。面白いのは、山間地に行くと、全校生徒15人という中学校や小学校がたくさんあり、15人の子どもに授業をするのに、見学者が30人ぐらい来ることです。お母さんだけではなく、お父さんも農作業を休んで見にくるのです。富良野の農家の方たちは、自分たちは農家で、自分の子どもにも農業を継いでもらいたいけれど、これからの日本の農業は高価格、高品質の付加価値で勝負していくしかない。だから農家ほど、どんな作物を作るかという発想や消費者のニーズをくみ取る柔軟性、どうやって売っていくかというコミュニケーション能力が必要になる、農業こそがクリエイティブ産業なのだという考えを非常に強く持っているのです。だから、そういうことに非常に興味を持っています。

要するに、第1次産業を第3次産業に転換させた非常に強い成功体験をきちんと継承させるということです。富良野は、昨年度から富良野高校に道内唯一の演劇コースをつくりました。札幌より早いです。別にそれは芸能人をつくりたいわけではなく、30年後も農業と観光のまち富良野を持続できるような、発想豊かなコミュニケーション能力の高い人材を育成するというのが演劇コースの目的です。覚悟を決めているということです。

芦別は富良野の隣町です。悪口を言うので関係者の方がいたら申し訳ありません。芦別には、大観音や世界最大の五重塔があります。五重塔は中身がホテルで、鉄筋コンクリート建てです。この隣に三十三間堂を模したホテルがもう1軒あります。それから、大観音と五重塔の間に、今はもう走っていないのですが、550mの道内唯一のモノレールが走っていました。五重塔の真下には、回る聖徳太子がいます。何で回るのかよく分かりませんが、あらゆるものがあります。

さらに、その向こう側に第3セクターで破たんしたカナダ村が広がっています。その隣には、「北の京（みやこ）芦別」があります。京都の隣にカナダが

あるのです。僕は真冬に地元の方に「ちょっと見てください」と言われて連れていってもらったのです。人っ子一人通っていないのです。地獄絵図です。なんだか分からないのです。山の向こうが富良野です。富良野にはこんな醜悪な建物は一つ也没有。今、お花畑で富良野以上に人気のある富良野の隣の美瑛町は、景観を守るために高規格道路の延伸を拒んでいます。道路なんか来ても素通りされるだけだ、うちは景観で世界と勝負しているから道路は要らない、これ以上便利にする必要がないと拒んでいるのです。

要するに、自分たちの文化は何で、自分たちの誇りになるものは何で、そこにどんな付加価値を加えればよそから人が来てくれるかを自分たちで判断できないと、あっけなく東京資本に収奪されてしまいます。芦別にあるものは全部、1990年代に東京のディベロッパーにだまされてつくったものです。今どき大観音を建てても人は来ません。北海道の大自然を楽しみに来ているのに、なぜ550mのモノレールに乗らなければいけないのですか。でも、田舎の方はあっけなくだまされてしまうのです。田舎が悪いのではないのです。だまされる田舎者が悪いのです。

## 9. 文化の自己決定能力をつけるために

自分の文化を自分で決定できる文化の自己決定能力はどこから来るのでしょうか。それは文化資本です。センスです。センスがなければあっけなく東京資本、グローバル資本にだまされます。先ほど紹介した芦別の建物は、全部で100億円掛かっています。2年前に全部セットで1億円で売りに出されました。100億円まる損です。

もう一つ失敗した理由があるのです。芦別の南には破たんした夕張があるのですが、夕張と一緒に旧産炭地なのです。だから1990年代まで圧倒的な保護政策がありました。政府の保証でいくらでも地方債を発行できたのです。親が大金持ちでいくらでも使えるクレジットカードを持ってしまったようなものです。だから、ばかばか使ったのです。皆さん、夕張の解体される観覧車の映像は今も覚えていらっしゃるでしょう。あのような施設や、道頓堀の1,000mプールのような施設がたくさんあるのです。夕張も芦別でもお金がいくらでもあって、自分のお金でないと考えなくなります。繁昌亭は2億円だけれど、地元の旦那衆が必死になってそれを集めたのです。商売をする方にとってはお金は大

変なことです。自分たちのものだという意識があれば、どうにかしてみんなで盛り上げるのです。しかし、それがありませんでした。

文化の自己決定能力は、文化資本によります。センスです。だったら東京の子は圧倒的に有利です。今は資本主義の始まりの時期ではないから、資本家が労働者をむち打って搾取するような時代ではありません。東京資本、グローバル資本がもっと巧妙に文化力の差異を利用してだましてくるのです。自立できない地方は破たんするまでどんどん搾取され続けます。これが今の日本をとて危うい状況にしています。

今は昔のように、景気対策の公共事業を行っても地方は潤わないに決まっています。昔は公共事業を行えば、土建屋さんにお金が一回り、従業員たちがまちで買い物してスナックに行き、歓楽街も潤ってお金が回ったから潤っていました。しかし、今は東京資本のショッピングセンターで買い物する。スナックなんて行かないでしょう。ガストなどに行ってしまう。だから、地域でお金が1周する前に全部もう一回東京に吸い上げられているだけなのです。今の構造では、いくらお金を投下してももうかるのは東京だけなのです。みんなそんなことを分かっているから、地産地消ということを言いはじめました。でも、農産品だけを地産地消しても、日本の家計のエンゲル係数はせいぜい二十数%です。それを全部地産地消することは不可能です。輸入に頼らなければいけない食材がたくさんあります。

そうすると大事なものは、家賃などの基本的な支出と、エンゲル係数二十数%の間にある可処分所得をどれだけ地元で落とせるかなのです。大事なことは、ソフトの地産地消だと思うのです。自分たちでつくり、自分たちで楽しみ、そこにどんな付加価値を加えればよそからも人が来てくれるかを自分たちで考えなければいけません。よその人は考えてくれません。でも、そんなに難しいことではありません。一番分かりやすい例はB級グルメです。B級グルメはやっている人たちが一番楽しそうです。ああいうものしか絶対に成功しません。取って付けたようなものは絶対に成功しないのです。それをやるためによその人の力を借りるのは全然OKです。しかし、自発的に自分たちが考えて、自分たちが苦しんで、自分たちの頭を使ったものでしか地域は豊かになれないのです。広告代理店に丸投げしても、それは東京資本に収奪されていってしまうだけです。

だとするならば、なぜ宮沢賢治がこういうことを書いたか分かります。『職業芸術家は一度亡びねばならぬ 誰人もみな芸術家たる感受をなせ 個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ 然もめいめいそのときどきの芸術家である』。

宮沢賢治は当時1920年代の最先端の農業技術を学んで、その農業技術によって、岩手の農民を貧困や飢餓から救おうとしました。余談ですが、宮沢賢治は私のふるさと駒場に、記録に残っているだけでも2回訪れています。当時、駒場農学校というのが、札幌農学校と並ぶ最も重要な農業教育の拠点だったので。そういう最先端の技術を学んで、それを岩手の農民の子どもたちに教えました。

でも、あるとき宮沢賢治は気が付いたのだと思うのです。どんなに農業の収穫が増えても、それだけならば全部それは東京資本に収奪されてしまう。特に当時の米は米相場の乱高下によって、東北の農民がたくさん作れば米の値段がぼんと下がる、少ないとそれはそれで貧乏になるというように、どうやってもそれだけでは豊かにならない構造があったのです。

宮沢賢治はこのようにも書いています。「曾（か）つてわれらの師父たちは乏しいながら可成（かなり）楽しく生きてゐた そこには芸術も宗教もあった いまわれらにはただ労働が 生存があるばかりである 宗教は疲れて近代科学に置換され然（しか）も科学は冷く暗い」

司馬遼太郎先生は晩年、岩手県南部一藩は徳川幕藩体制に組み込まなければデンマークのような酪農国家になれたのではないかと、何度かお書きになっています。岩手県南部は、中世に平泉にあれだけの金色堂を建てられるほどの富を持っていたのです。金がたくさん出たからです。しかし、それが徳川幕藩体制の米本位制に組み込まれることによって、米を作らなければいけなくなりました。米を作って、それを大阪に一回出荷して、大阪でお金に替えて他の商品を得るのです。これが徳川幕藩体制の米本位制度です。

米を作らなくてもいいのは、蝦夷地を抱えた松前藩だけです。他は全部米を作らなければいけません。でも、当時の日本の農業技術で岩手県で米を作るのは無理だったのです。三陸沖は世界一の漁場といわれます。暖流と寒流がぶつかる潮目だから魚がうまいのです。でもその代わり、寒流が5年に1回ぐらい下がってきて、山背という冷たい風が吹いて、5年に1回必ず冷害が起これると

いう構造になっているのです。東北は徳川幕藩体制に組み込まれたために大変疲弊します。

高野山の弘法大師（空海）が中国に行き、密教を輸入できたのは、全て東北の金で賄われたからです。当時はまだ岩手県では採れなかったので、福島のお金を持っていき、それであれだけの密教の原典や密教のいろいろな装飾品を直輸入しました。

江戸時代も東北の米で大阪の取引は潤ったのです。今回の東日本大震災で、私たち東京の人間が痛感したのは、どれほど東京が、あるいは京浜工業地帯が、東北に下支えされてきたかということです。もちろん電力も、サプライチェーンもです。でも一番大きいのは人なのです。ずっと東北は人を提供してきました。日清、日露の時代には一兵卒を出しました。大正、昭和の時代には寒さに強いので、満蒙開拓の先兵を出しました。私の母のふるさは秋田なので、母のすぐ上のお兄さんは14歳で満蒙開拓少年義勇軍に参加しました。農家ではなくても、東北の次男坊、三男坊はみんな満州に行きました。

そして戦後は集団就職、出稼ぎの供給です。人をどんどん出して、自立性が根絶やしにされているところに、今回の東日本大震災が起きました。だから復旧はするけれども、神戸と違ってなかなか復興が進まないのです。最終的に人を育てていかないと、あるいは人に文化資本をつけていかないと、社会は脆弱になってしまいます。そこに何かの災害が起これば、もうそれは自立回復が望めないような状態になってしまいます。

文化政策というのは、今まではやった方がいいとか、心を豊かにとか曖昧なポジションで扱われてきた分野でしたが、これからは福祉や医療や経済政策と並んで、社会全体を持続可能なものにするために最も重要な分野の一つになっていくのではないのでしょうか。ヨーロッパでは既にそうなっています。そのように捉えて文化政策について考えていただけるといいのではないかと思います。

文化というのは非常に範囲が広く、教育、観光、スポーツなど隣接領域も大きくて、何を文化政策とするかはさまざまですが、ぜひ皆さんが関わるポジションにおいて、地域の子どもの文化の自己決定能力、文化資本を増やしていくような文化政策をしていただけるとありがたいと思っています。